

「西洋教育史概説」

－ 教育思想の展開と発展の視点から －

曾我 雅比児

岡山理科大学理学部基礎理学科

(2019年10月31日受付、2019年12月9日受理)

第1章 古代・中世の教育

1. 古代ギリシアの教育

1. ポリスの教育

BC. 20世紀から12世紀頃にエーゲ海沿岸付近に定住したギリシア人は、BC. 10世紀頃からポリスすなわち都市国家を形成するようになる。すでに初期ギリシア時代に、民族性も生活形態も異なった2つの代表的なポリスが存在していた。一方はドーリア人の形成した厳格な軍事国家スパルタであり、他方はイオニア人の自由で民主的な法治国家アテナイであった。

ポリスの第1の型は厳格な軍事国家であり、スパルタがその代表であった。市民生活に対する統制は厳格そのものであり、リュクルゴス法により、男子は7歳頃から成人(30歳)に至るまでを国家兵舎で暮らし、戦士として鍛えられた。個人はあくまでも国家のために存在するという考え方で貫かれていた。プルタルコス(AC. 46頃-125頃)の『英雄伝』の記載によれば、生まれた子どもは厳しく審査され、健康な者のみに生きる権利が認められ、それ以外の子どもは抹殺された。

もう一つのポリスの型は民主政国家であり、アテナイがその代表であった。アテナイは法律優先主義に立ち、個人が尊重され、独自の精神文化を成立させた。アテナイでは、「人格の円満な発達」を目的とする教育が展開されており、そこでは理性と感情の調和的発達が前提とされていた。その意味でもアテナイは、デモクラシーの国家を世界で最初に建設した民族であるといえよう。スパルタ人が力を重んじたのに対して、アテナイ人は正義と自由を重視する国民であった。

アテナイの伝統的な教育のプロセスは概略以下のものであった。7歳頃までは家庭にあって母親と乳母の保護を受けるが、やがて、音楽学校(ディダスカレイオン)と初等体操学校(パライストラ)に通って、知的、道徳的、ならびに身体を調和的に発達させるための身体的訓練を受けた。これらの学校はいずれも私立施設であり、少年は、これらの学校に通い始めると、乳母の手を離れて、教僕(パイダゴゴス)の監督下におかれた。さらに、16歳になると、読み・書きの教育を一切中止して、国立の高等体操学校(ギムナシオン)に入り、戦士養成を目的とした高度な体技の訓練を受けた。

2. アテナイの人文主義教育思想

①ソフィストの活躍

個人の発展に重きをおくアテナイの新教育の主要な担い手となったのがソフィストと呼ばれる人々であった。歴史上最初の職業的教師集団と呼ばれている。彼らの多くはアテナイ生まれでない外国人で、ギリシア各地を広く旅行することによって、政治や社会制度や自然現象等について知識を身に付けた実務の研究者であった。彼らは、そうした学問を基にして、アテナイ社会で個人的成功を得ようと願う青年に、弁論術(市民の集りや各種の会議において、自らの考えを言葉巧みに訴えて、聴衆の賞賛を勝ち取る術)やアテナイの新しい社会生活に必要な諸種の知識を授けた。

「人間は万物の尺度である」の言葉で有名なプロタゴラス(BC. 590頃-520頃)はソフィストの代表者であり、その言葉が示すように彼らの思想的立場は真理や規範の普遍的・客観的尺度は存在せず、いっさいはただ個人の判断によるというものであった。このような考え方を批判し、アテナイ市の救済を若者の道徳的救済を通じて行おうとして登場したのが、ソクラテスおよびその弟子たちであった。

②ソクラテス

ソクラテス(BC. 470頃-399)の父は彫刻家で、母は優れた助産婦であったといわれている。彼は自分の生まれや地位、名誉、外見等、世俗的な事柄には無関心で、当時のアテナイの人々と自由に交わり、とくに若い人々と語ることを愛して、「善く」生きることの吟味と実践に一生を費やした。

ソクラテスは、その一生の仕事として人々に「無知の知」を気付かせることに専念した。青少年を「善く」ということは、ソクラテスにとっては、彼ら「真の知恵(=徳)」に関して無知であることを自覚させ、しかも「善さ」に向かって生きようにさせること以外にはなかった。

ソクラテスは、親であれ、大人であれ、「善さ」が何であるかを知らない者として、子どもたちの「仲間」であり「友人」でなければならないと考えた。それと対照的に当時の教師であったソフィストたちは、若者たちにさまざまな生活上の智恵や知識を教授することを職業としたが、ソクラテスは意識的にソフィストと区別して、あえて自分を「教師」と呼ばず、若者たちの「友人」であり「仲間」として関わった。

ソクラテスは、「汝自身を知れ」や「無知の知」の有名な言葉が示すように、相手との問答を通して無知を自覚させ、新たな真理へと到達させる「産婆術(問答法)」を実践した。地位や名誉、金銭等世俗的ないっさいのことを超えて人々と交わることを愛したソクラテスは、ソフィストが主張する「真理の相対性」に対して、「真理の普遍妥当性」を説いた。自著はないが弟子のプラトンがソクラテスの思想や言動を克明に書き残している。

ソクラテスは若者をたぶらかす悪人であると裁判にかけられ、人間吟味の放棄か死かを選択しなければならず、弟子たちによって逃亡・亡命も勧められたものの、これを拒否し、結局、死のほうを選んだ。彼の生前の問答法と愛の教育も、アテナイの人々を真理に目覚めさせることはできなかった。しかしソクラテスの死を通じて彼らは初めて真実に生きることを学び始めた。ソクラテスの死は、最大の人間吟味として、アテナイ市民のみならず今日に至るも全人類に影響を与え続けている。

③プラトン

プラトン(BC. 427~347)はアテナイの名門の家に生まれ、早くから政治家になることを希望していたが、アテナイの腐敗した政治に失望し、20歳の頃からソクラテスに師事して哲学研究に従事した。

プラトンは、師ソクラテスにならって普遍的なものの探求に関心を寄せた。しかし、ソクラテスは普遍的なものを探求する時、絶対普遍(たとえば、善さそのもの・美しさそのもの)についての無知の自覚こそ大切だと考えていたのに対し、プラトンは絶対的に普遍的なもの(イデア)が存在するとし、そのイデアをある者は認識しようが、ある者は認識しえないと考えた。

プラトンは、こうした考えに基づいて、善のイデア(善さそのもの)を認識しえた哲学者が王として統治する理想の国家とその国家を実現・維持するための教育計画とを構想し、それを『国家』に著した。プラトンによれば理想の国家は3つの階級から成り立っている。第1は認識した善のイデアに基づいて国家を治める統治者階級、第2は国家の防衛にあたる軍人階級、第3は生活に必要な物資の生産や売買に携わる労働者階級である。これらの3つの階級は、それぞれに知恵、勇気、節制をその徳としている。また、プラトンによれば、人間は同様に3つの能力(知恵を徳とする理性、勇気を徳とする気概、節制を徳とする欲望)をもって生まれてきており、これらを後天的に変えることはできないという。すなわち、プラトンは、理性を多くもって生まれてきた人、勇気を多くもって生まれてきた人、欲望を多くもって生まれてきた人が、それぞれに統治者階級、軍人階級、労働者階級を構成し、軍人階級と労働者階級が、統治者階級の支配によく従いながら、それぞれの徳(勇気の徳と節制の徳)を発揮するのが正義であり、国家全体がこの正義と知恵と勇気と節制の徳を実現した時、理想の国家(最高に善い国家)が誕生すると考えたのである。

④アリストテレス

プラトンの思想が形而上学的な深さと思索的鋭さを特徴とし、教育思想史上の最初にして偉大な理想を構想したものであったのに対して、アリストテレス(BC. 384 - 322)の思想はまさしく、冷静で公平無私な現実感覚、驚嘆すべき探究精神、資料収集への熱意という点の特徴とするものであった。アリストテレスの影響力は歴史的にはプラトンよりも遙かに強力で、イスラム世界からキリスト教世界にまで及んだ。

プラトンが主催する私塾(アカデメイア)に学んだアリストテレスは、プラトンの理想主義の哲学とは反対に、实际的で現実的立場をとり、いままでの知識の全体を統合しようとした。後にアテナイの郊外に学園リュケイオンを開設する。主著の『政治学』、『ニコマコス倫理学』等で教育思想を論ずる。

プラトンの学問が観念的で思弁的であったのに対して、アリストテレスは経験的・実証的で、人間生活における世間的知識を与えようとした。『政治学』においては、人間のもって生まれた素質は、習慣によって変化し、よくも悪くもなると考えた。プ

ラトンがエリートの教育に重点を置いたとすれば、アリストテレスは国民の教育の基本的なあり方に関心をもっていたといえよう。

II. 古代ローマの教育

1. 父親の権威と家庭教育

初期のローマ人は、父親を中心とする家庭を社会生活の基本単位として農業と牧畜に従事していた。父親は家庭における宗教的祭司であり、財産の管理者であり、家族に対して生殺与奪の権をにぎる絶対的支配者であった。父親の権威は「父権」とよばれ、子どもは父親を中心とする家庭の教育によって市民となるように育成された。その教育は素朴で保守的なものであり、共和政初期の実践的なローマ人の精神を反映していた。

ローマ人は家庭生活や社会生活において保持されていた伝統を「祖先の慣習」として尊重した。それが、BC. 449年、ローマ市民の権利と義務を定める「十二表法」にまとめられ、子どもにとって重要な学習内容とされた。ローマ初期の教育は、伝統に従い父親の生活を模倣する家庭教育によって行われたのであった。

2. ギリシア文化の影響と学校教育

BC. 3世紀にはすでに世界をその支配下に治めつつあったローマは、被征服民族のローマ化政策をすすめるをえなかった。しかしその同化政策は、ローマ文化への反作用をも生みだした。逆にギリシア文化がオリエント諸国を経て流入し、ローマのギリシア化が見られるようになる。その結果、家庭教育のみによってはローマ市民としての新たな基本的な知識や能力を獲得できなくなった。このようにギリシアの文学や思想に対する知的な欲求が高まったことによって、新しい教育のあり方が必要とされるにいたったのである。

一般市民のためには、読み・書きのための初歩教育機関（ルードゥス）が生まれた。ルードゥスの上には文法学校も生まれた。ここではギリシア語、ラテン語とともにギリシア文学が教えられた。この学校の上級コースから、のちに修辞学校が派生する。これは高等教育機関にあたるもので、将来の政治的実務に従事する青年に教育を施した。

3. 古代ローマの教育思想家

①キケロ

ローマ共和政時代の終末期頃に活躍したキケロ（BC. 106 - 43）は、教養豊かな権勢ある政治家、輝かしい雄弁家、著作家であるだけでなく、哲学者、教育理論家としてもまた、ギリシア精神とローマ精神の融和を目指した。その意味でキケロこそが、その後2000年にわたって重要な教育理想として尊重された人文主義的な教育理念を最初に明確に理解し、根拠づけた人物といえるだろう。主著の『雄弁家論』に見られる人文主義教育の主張は、ルネサンス期以後の教育論の源流となる。また彼の文章はラテン文の模範とされた。

②クインティリアヌス

帝政時代の最も重要な教育学的理論家はクインティリアヌス（AC. 35 - 100）である。彼は、スペインで生まれ、ローマで法律家の修業をした後、修辞学校を開いた。ローマでの20年間の修辞学教師としての体験は主著である『弁論家の教育』に収められている。この書物は一般教育学や弁証法についての充実した価値ある文献としてその後も、とくにルネサンス期の人文主義者たちに重要な教育学的権威をもって重視された。

クインティリアヌスの教えに従うと、教育学上の重要な原理は、教師は子どもの個人的関心を目覚めさせ、各自の個性に理解を示し、個性の発展を考慮しつつ、子どもが自主独立の人間になることができるように教育してゆくことである。

III. 中世の教育

1. 中世キリスト教世界の教育

①キリスト教文化の発展と教会の教育

西ローマ帝国の滅亡（476）から約10世紀にわたるヨーロッパ中世は、従来、古代古典文化とルネサンスの狭間にあって、文化的には不毛の暗黒時代といわれてきた。しかし実際には、古代古典文化とゲルマン民族の伝統精神とキリスト教文化が対立抗争しながらしだいに融合し、独特のヨーロッパ文化を形成していく文化的胎動期であったといえよう。

教会は、中世の人々にとって魂の安息所であると同時に、教育および学問研究の場でもあった。実際にその拠点となったのは、ヨーロッパ各地に存在した修道院に設けられた付属学校、司教座聖堂（カテドラル、本山）に設けられた付属学校および各教区に設けられた教区学校などであった。

②修道院付属学校

修道院の起源は、3世紀頃自然条件の厳しいエジプトに発し、禁欲と隠遁の生活による厳格なキリスト教会のあり方を信条として、4世紀頃には東方諸国に普及していった。それが永続的な型を整えたのは、聖ベネディクトゥス(487頃-567頃)が529年に、西欧最初の修道院をモンテ・カシノに建て、服従・清貧・貞潔を修道士の戒律として組織的活動を始めてからであり、8世紀には西欧全域に普及し、教会による教育活動の中心となった。

修道院では、修道士の自己修練が主体であったが、その傍ら修道士を志す子どもの教育が付属の「院内学校」で行われたのである。その教育内容は、肉体労働をはじめとして、ラテン語の詩編・祈禱文の暗記、読み方・書き方、唱歌および宗教行事に必要な暦の計算の方法などであった。

③司教座聖堂付属学校

司教座聖堂の教育活動は、8世紀中頃から普及し始めた司教座聖堂参事会のなかで、とくに教育を担当する聖職者が現われてくることによって始まったようである。聖職志望の少年にラテン語をはじめ、算術、唱歌、そして修道院と同じく高等教科として「7自由科」を教えた。7自由科（文法、修辞学、弁証法の3学と算術、幾何、天文学、音楽の4科）の上には、倫理学または形而上学がおかれ、最高位には「神学」の研究、すなわちスコラ学が位置づけられた。

修道院や司教座聖堂のほかにも教育活動が行われた場合は、各教区の教会に設置された教区学校であった。この学校は、各教区内の市民子弟を聖職隊員に養成したり、ラテン語文法や読み方、キリスト教入門を教え、聖職者になるための職業教育を内容としたものであった。

2. キリスト教神学

①アウグスティヌス

アウグスティヌス(352-430)は初期キリスト教会の偉大な思想家である。若き日にマニ教を奉じるが、後にミラノでキリスト教の洗礼を受けて改心する。生地である北アフリカに帰り、ヒッポの司教に就任し、同地で没する。主著には『告白』や『神の国』等がある。

アウグスティヌスは、素直にキリスト教徒になった人ではない。彼の自叙伝的作品『告白』は、異教徒であった彼が人間的な数々のあやまちを犯し、苦悩しながらついにキリスト教徒に改宗するまでの生々しい魂の遍歴を伝えている。アウグスティヌスは、人間的な愛欲の悩みの果てに、キリスト教に帰依し、ついに官能の誘惑を振り切って、聖職に後半生を捧げたのである。

②スコラ哲学

スコラ哲学は、トマス・アクィナス(1225-74)によって大成された神学思想で、アリストテレスの論理学および弁証法が重視された。スコラ哲学は中世ヨーロッパの教会や修道院付属の学校や大学の教師等の研究した学問である。哲学と神学がその中心で、その内容は、キリスト教の教義を理性的に弁証することであった。主著は『神学大全』である。

3. 世俗社会の教育

①騎士の教育

中世の騎士は君主への奉仕者として、騎士道を尊重した。それは武技・宗教・礼儀の三要素から成り立つ。宮廷の生活を通して(宮廷学校)、王侯の小姓(7~14歳)となり、騎士の従者(14~20歳)として武芸に専念し、ようやく騎士(21歳)となれた。騎士7芸とは乗馬・水泳・弓術・剣術・狩猟・チェス・詩を意味する。

②ギルドの教育

商工業者を志望する者は、同業組合であるギルドの規則に従って徒弟教育を受けなければならなかった。10歳頃から親方のもとで住み込んで徒弟奉公を行い、この期間を無事に終えて初めて、職人としてギルドに加入することが認められた。

③大学の発生

11世紀の末には、アラビア風の医学研究から立ち上がった南イタリアのサレルノ大学が姿を現した。12世紀の初頭には、北イタリアのボローニャ大学において、「ローマ法」および「教会法」の法学研究が始められた。さらに同時期にはフランスのパリ大学を中心に神学の研究が始められ、学問への関心は中世前期の文化的沈滞を打破するものであった。

第2章 近世の教育

I. ルネサンスと教育

1. ヒューマニズム（人文主義）

ルネサンス期には、中世に存在しなかった世界観や人間観としてヒューマニズム（人文主義）が生じた。ヒューマニズムとは現世に生きる人間を中心とする世界観・人間観であり、中世のような来世に救いを求める宗教的・教会的世界観とは大きく異なっていた。ルネサンスは歴史上14、15世紀から16世紀前半に生じた文化的傾向の総称で、古代ギリシア・ローマの文学・芸術の再生運動であった。

ルネサンスは当時の新興階級である商工業者や貴族等の上層階級の間には拡大した運動であったので、その教育（人文主義的教育）もまた、一般庶民のものではなかった。それゆえ人文主義的教育は、第一に、幅広い教養を身に付けることを教育の目的とした。そしてそれは古代ギリシアやローマの古典、とくにキケロ、クインティリアヌス等のローマの古典、あるいはホメロス、プルタルコス、クセノホン等のギリシアの古典を重んじた。

第二に、ヒューマニズムの教育は、人間尊重の立場から、個性ある人間形成をめざした。幅広い教養と同時に強健な身体をつくりあげることを重視した。中世の教育が体育を軽視したのに対して、ヒューマニズムの教育は人間の均整のとれた美しい肉体の発達を人間の理想の一部と考えたのである。

2. ルネサンス期の代表的教育者

15世紀のイタリアにおけるルネサンス期最大の人文主義者といわれているヴィットリーノ(1378 - 1446)は、1423年にマントア侯の設立した宮廷学校（楽しい家）の教育に従事した。彼はクインティリアヌスの教育方法の原則に従って、ギリシア・ローマ古典と騎士階級の技芸と宗教・道徳教育を取り入れて成功した。

エラスムス(1469頃 - 1536)は、オランダ生まれの北欧最大の人文主義者として有名である。彼はギリシア・ローマの古典に精通し、多彩な文化活動を展開した。伝統的教育を否定し、遊びながらの楽しい学習を提唱する。主著の『愚神礼讃』は、中世に対するヒューマニズムの批判精神を代表するものである。また教育に関する著作としては『幼児教育論』等がある。彼のヒューマニズムは子どもの奴隷化を鋭く批判し、子どもを自由な独立した人格として認めた点で、史上初の子どもの人権宣言ともいえよう。

ヴィーヴェス(1492 - 1540)は、スペインが生んだ最大の人文主義教育思想家で、児童生徒の個性に応じた学習指導を提唱した。主著に『学問論』があり、これは15、16世紀を通じて最も体系的に整った教育論であると評価されている。

II. 宗教改革と教育

イタリアを中心とする南欧のヒューマニズムは、個人の教養の形成に重きが置かれたため、芸術的な面でのルネサンスとなった。それに対して、北欧のヒューマニズムは社会的人文主義として、社会の宗教的、倫理的改革をめざす運動となった。これがいわゆる宗教改革へとつながってゆく。

1. 宗教改革家たちと教育

マルティン・ルター(1483-1546)はドイツの神学者で、宗教改革の口火を切った人物である。ローマ・カトリック教会はローマのサン・ピエトロ教会建設のために資金を集める目的で、免罪符を販売し、その購買により信者の罪が許されると宣伝した。ルターはこれに反対し、1517年10月に「95か条の提題」をドイツ東部の都市ヴィッテンベルグの教会の扉に掲げてローマ・カトリック教会への批判活動を開始する。「人は信仰によってのみ義とされる」ことがルターの主張の原理であったからである。

ルターは教育に強い関心を寄せ、公教育制度については、国家が学校を設立しすべての男女に無償の普通教育を受ける義務と権利を求めた。『ドイツの全都市の市参事会員に対するキリスト教学校の設立維持に関する勧告』では、福音主義の学校の設立・維持を都市の政治家に勧告した。

ドイツの人文主義学者であるメランヒトン(1497 - 1560)は、ルターの影響を強く受け、彼の協力者として、教会改革と学校規程の草案を作成した。「ドイツ国民学校の父」と呼ばれている。

一方、スイスの宗教改革者カルヴァン(1509 - 64)によって主張され実践された宗教的・文化的な改革思想をカルヴァニズムという。彼は『キリスト教綱要』によってジュネーブの神聖都市国家の教育計画を立て、信仰と政治と教育の一体化を目指した。神の絶対性を根拠に予定説を唱え、職業等の世俗的な活動に積極的に参加することに宗教的意義を認めた。

2. カトリックの学校改革と教育制度

宗教改革の深化とともに、カトリック教会の立場が劣勢になるに従い、その回復を試みるための自己改革、すなわち反宗教改革運動が展開されるようになった。この中心となったのがイエズス会の中等・高等教育計画『イエズス会学事規定』であった。

その中でも中心的役割を果たしたのが、1540年イグナティウス・デ・ロヨラ(1491 - 1556)によって設立されたカトリックの修道会であるイエズス会である。ロヨラは、ルター等のプロテスタント教会の宗教改革運動に対して、カトリック教会内部から改革運動を実践した。この禁欲的修業は、16-18世紀に主として欧州の高等教育機関を中心に文化的・学問的影響を与えた。

第3章 近代の教育

I. 近代教育の登場 (17世紀)

1. 実学主義教育

実学主義の教育とは、一般に17世紀のヨーロッパの教育の性格を意味するが、具体的知識や実際的な技能を重視する立場をとる。文学的・古典的な分野ではなく、むしろ歴史・政治・自然科学を重んずる教育を実践した。

16世紀頃には、古典語の学習は、古典を研究する手段から、古典語の学習そのものが目的となり、むしろ形式的な学習に陥るようになる。この点が批判され、17世紀には、現実の生活に実際に役立つ、世俗的な教育が求められるようになってきた。

2. 実学主義教育思想家

①ラトケ

ボルフガング・ラトケ(1571 - 1635)は、ドイツの近代教授学の先駆者として、子どもの感覚や直観を重視し、自然の順序に従った合自然の新しい教授法を提唱した。彼は、「知は力なり」で有名なイギリス経験論哲学者ベーコンの思想を実地に適用して、コメニウスに橋渡しをした。1612年にドイツ国会に提出した教育改革案(フランクフルト意見書)の中で、彼は子どもの心理構造に配慮した教育内容や教授方法の組織化を訴えた。

②コメニウス

ヨハン・コメニウス(1592-1670)は、17世紀の西洋での最大の教育思想家であり、学校教育の改革者であった。彼はチェコのモラヴィアに生まれ、オランダの大学で神学と哲学を修め、ボヘミア同胞教団の牧師兼学校教師となるが、1618年に同教団に関わって始まった三十年戦争によって、逃亡と亡命の生活に入る。

各地を転々とした後に、ポーランドに逃れ、そこで牧師およびギムナジウム教師として13年間とどまり、教育史上の名著といわれる『大教授学』(1657)を執筆した。

コメニウスは「近代教授学の祖」として知られている。彼は、教育目標を「有徳」と「敬信」とし、それに至る手段として「汎知」の会得を提言した。そのための教育方法が自然界の諸法則の模倣であった。『大教授学』は自然法則に基づく、厳密に体系づけられた教え方を扱ったものである。簡単なものから複雑なものへ、全体的なものから各部分に及ぶ教授法を組み立てたのである。

主著の一つ『世界図絵』はコメニウスが1658年に著した世界で最初の絵入りの教科書として教育史上、特筆されるべきである。図絵によって外界の事物を直観させながら、同時に説明文を通して言語を学ぶことを意図した教科書であった。コメニウスは、実物の直観から言語的説明に移行するという考えを示した。実物の提示が困難なときには図絵による理解が重要との見地から、『世界図絵』を作成したのである。さらにこの直観教授の考えは、ルソーやペスタロッチへと継承されてゆく。

③ロック

ジョン・ロック(1632 - 1704)は、英国の哲学者で、イギリス名誉革命時代を代表する思想家でもある。子どもの精神を白紙ととらえたうえで、教育とは白紙に印象を刻むことであり、白紙の状態に経験が書き込まれることによりその人の観念が形成されるという有名な「精神白紙説(タブラ・ラサ)」を主張した。彼の感覚的経験論や功利主義は、18世紀のフランス啓蒙主義の環境論的教育学説の橋渡しをする近代教育の原理となる。

ロックは、当時のイギリス社会の教養人である紳士を育成しようと試みた。主著である『教育に関する若干の考察』(1693)は、ルソーの『エミール』にも強い影響を与えたといわれている。ロックは、当時のイギリス社会に必要な、豊かな社会性と有用な知識を備えた教養人である紳士を育てようとした。序文の中でロックは「紳士は、健全な身体と道徳と知識を持つべきだ」と記し、紳士に不可欠な条件として健康な身体を重視した。このような彼の思想を紳士教育論という。

II. 近代教育の展開 (18世紀)

1. 啓蒙主義の教育

18世紀は啓蒙主義の時代であり、中世以来の伝統や社会制度、人間に関する思想が合理的、理性的立場から批判され始めた。その意味で、18世紀は19世紀以後成立していく近代社会の先駆的な時期といえる。

フランスのルソーが『エミール』のなかで子どもを中心にすえた自然主義の教育論を展開し、「子どもの発見者」と呼ばれた。18世紀の教育改革は、偉大な思想家ルソーの影響のもとにドイツにおけるバセドウやザルツマン等の汎愛派の教育活動が展開されていく。そのなかでも、ルソーが強調した「自然」を福音として、その「自然」に従う教育の探究に一生を捧げた教育者が、スイスのペスタロッチであった。

2. 啓蒙主義教育思想家

①ルソー

ジャン・ジャック・ルソー(1712-78)は、スイスのジュネーブに生まれ、フランスで活躍した啓蒙期の社会思想家である。近代教育思想の立役者でもあるルソーは、30歳でパリに出て、啓蒙思想家と交際し、『学問芸術論』(1750)で一躍有名となる。以後『人間不平等起源論』や、民主主義社会の理論として『社会契約論』を執筆し、その社会に生きる人間の形成論として教育的名著の『エミール』(1762)を刊行した。冒頭の言葉「創造主の手から出る時にはすべては善であるが、人間の手にかかるとそれらはみな悪いものになってしまう」に示されているように、ルソーは子どものあるがままの可能性を自然のままに、大人の手で阻害することなく、伸ばしていこうという消極的教育論を唱えた。

「消極教育」とは、知識偏重の教育を批判しそれを抑制する教育論の一つで、特にルソーによって定式化された用語であり、自然が示す道に従い、認識の道具としての諸器官を完全にする教育を指し示す。子どもの自然で自由な自発性を重視し、権威や強制的介入を排除するべきであるとする教育論である。

『エミール』は、架空の少年であるエミールについて、その誕生から結婚にいたるまでの成長過程を描いた小説である。そこでは、子どもを早くから大人中心の型にはめ込もうとする伝統的な教育を批判し、子どもの自然な営みに従った子ども中心の教育であるべきことが説かれている。子どもは大人と異なった独自の成長過程やものの見方をもっているのだから、大人はそれをよく観察し、その表れを発見し、保護してあげることが大切であると彼は強調する。ルソーが「子どもの発見者」といわれる所以がここにある。

②汎愛派

汎愛学院はバセドウ(1724-90)によってドイツのデッサウに設立された学校で、汎愛学舎とも呼ばれる。彼は実務的実行力の秀でた市民を育成するために、教会の学校監督権を国家に委譲し、徹底的な教育改革を主張した。教会支配による機械的な注入主義教育を排除し、ルソーに見られる人間性への関心や自然に則した教育という考え方を継承しながら、より現実的な教育を説くものである。また身体鍛錬や労作教育・遊戯学習を重視した。

なお、この学院に関わる教育者たちを総称して汎愛派と呼んでいる。なかでも『蟹の本』(1780)や『蟻の本』(1806)を著したザルツマン(1744 - 1811)や、領地内に農民学校を建設し『農民の友』を著したロヒョウ(1734-1805)などが有名である。

③ペスタロッチ

スイスのチューリッヒで生まれたヨハン・ペスタロッチ(1746 - 1827)は、フランス革命およびスイス革命の最中、18世紀から19世紀にかけて活動した「教聖」と呼ばれた人物であった。彼はその教育思想にとどまらず、献身的に教育を実践し、世界に大きな影響を与えたところに教育者としての偉大さが存在する。

ペスタロッチは、当初牧師になろうと決心して神学の勉強を始めた。しかし牧師という職業が自分に適さないと判断した後、ルソーの『エミール』に刺激され、庶民の弁護者になろうと法律学の研究に志を変えていった。大学生として愛国的な集まりで優れた友人たちと交わりを深めていくにつれ、ペスタロッチの関心は、不平等な社会の改革と貧しい民衆を救済することに移っ

ていった。ペスタロッチは 1768 年、スイスの荒地に農園ノイホーフを開き、相愛の間柄であったアンナ・シュルテスと結婚して農民とともに一生を過ごす覚悟をもって新生活に入った。しかし荒地の開墾は困難をきわめ、農場経営は挫折の連続であった。

次にペスタロッチは、農家の貧児や浮浪児を集めて学校を開き、衣食をともにし、農業や紡績の仕事を始めた。そしてその頃から、彼は教育についての深い省察とその思想的展開を開始するようになり、名著『隠者の夕暮れ』(1780)を執筆する。この著作は、「玉座の上にあっても、木の葉の屋根の蔭に住んでも、本質において同じである人間、彼はいったい何であるか」という有名な一句で始まるペスタロッチの最初の著作である。ペスタロッチは、人間は精神(知 Kopf)、心情(道徳 Herz)、技術(技能 Hand)の3つの能力をもつと考えた。そしてこの3つの能力を調和的に発達させることが教育の核心であると、彼は確信していた。その中でもとくに心情の領域、つまり道徳的・宗教的な領域を深めることが重要であると主張した。

その後、シュタンツで孤児院を開設し、そこでの教育活動は当時の幼児教育や初等教育に多大な影響を及ぼした。その実践記録が『シュタンツ便り』(1799)である。その後、ブルクドルフやイフェルテン等、場所を変えて孤児院経営に携わったが、理想の実現に対する情熱と努力には終始変わるところがなかった。

ペスタロッチは、彼の教育論を「基礎陶冶」という言葉で特徴づけた。彼によれば、頭(知的)、心(心情的)、手(身体的)という言葉をもって象徴される人間性の3素質は、それ自体に発達への衝動と発達の法則をそなえているから、これら人間の諸能力をその内在する法則に従って合自然的に発達させ、調和へと形成することが教育の本質であるという。彼の教育上の主著『ゲルトルート児童教育法』(1801)は、こうした人間理解のもとに教授理論を探究した成果である。ここで彼は、「直観教授」の考え方を示した。認識対象としての事物の本質は、数、形、語からなり、この事物の本質を捉えるものが直観であるとするペスタロッチは、感覚的印象から概念形式に至る認識理解に基づき、直観を基礎に、これを訓練する教授の方法原理を提唱した。すなわち、「自然力としての直観」を「技術力としての直観」へと訓練していくことこそ教授の任務であると考えたのである。

3. 新人文主義教育

18世紀後半から19世紀にかけ、ドイツを中心に、啓蒙主義の実利主義的傾向を批判し、真に調和的に完成した人間精神の育成を目指す新人文主義運動が展開された。

①カント

イマニュエル・カント(1724 - 1804)は、ドイツの哲学者で、ケーニヒスベルグ大学卒業後、同大学の教授・総長を長らく努めた。三大批判哲学の体系書、『純粋理性批判』・『実践理性批判』・『判断力批判』を著す。教育学についての講義録『教育学講義』(1803)のなかで「人間は教育によってのみ人間となることができる」とか「人間は教育されねばならない唯一の被造物である」と有名な言葉を述べている。彼は人間の自然な資質を尊重し、これを道徳的人格にまで高めることを教育の目的とした。また彼の教育についての考察は、国家を超えて広く人類や世界市民のあり方に向けられており、当時の現実主義的な一般的風潮に対してきわめて理想主義的な思索を展開していたところに特徴がある。

②フィヒテ

フランス革命の影響を強く受け、さらに19世紀初頭にナポレオン軍に破れたプロイセンでは、社会の近代化を図るために教育や文化面での改革が進められた。その中心で活躍した一人が哲学者のヨハン・フィヒテ(1762 - 1814)であった。彼はカント哲学から出発し、ドイツ観念論を展開し、さらにペスタロッチらの教育者たちとも交わり国民教育を主張した。ナポレオンのフランス軍駐留下ベルリンでの有名な教育講演『ドイツ国民に告ぐ』(1807-8)では、教育による祖国の再建を強調した。後に彼はベルリン大学総長にも就任した。

③フンボルト

プロイセンの首相であり言語学者のヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1767 - 1835)もまた一般的人間陶冶を説く新人文主義者であり、プロイセン改革期の教育政策等で活躍した。プロイセン国の公教育局長として、単線型教育制度の原型を立案した。なかでも中心的な中等教育機関であったギムナジウムの改革は特筆される。フンボルトもまたベルリン大学創設の中心的存在であった。

4. 公教育構想の登場—2つの型—

①絶対主義国家における公教育

ルネサンス、宗教改革によって切り拓かれていくヨーロッパ近代社会において、長らく人々の精神と現実政治を支配していた

ローマカトリック的な普遍主義に代わって、絶対専制君主が掲げる国家主義が支配原理として確立していく。国家（＝国王）に最高の価値をおく考え方を国民の間に普及させるための手段として義務教育を課す構想が現れてくる。

この型の公教育事業として最も有名なものは、ドイツの一領邦国家であったプロイセン王国フリードリッヒ2世（大王）（1712-86）の「一般地方学事通則」（1763）による義務教育制度であった。通則は、5歳から13・14歳までを就学期間と定め、学校で子どもたちに教義問答書などのキリスト教の知識や3R's（読・書・算）の習得を行わせることを目的に、授業時間、授業料、教科書、教育課程など諸規定を定めた。

プロイセン絶対主義体制下における民衆教育政策は、国家の安定発展のために国家の必要に応じた民衆をつくることに主眼が置かれたものであった。具体的には、国家に必要な官僚団と常備軍の確保、殖産興業ならびに農民の生産能力の向上、さらには治安維持などの国家目的実現の観点から、3R'sと宗教の教育を専らとする学校に子どもを就学させることを家長の義務として国家が課したのである。このような公教育思想を国家主義的思潮と呼ぶ。

②市民革命と公教育思想

絶対専制君主が支配する体制は、中世社会から近代社会への過渡期的現象であった。封建的政治体制が資本主義的経済体制に支えられている点に、絶対王制の特質があった。したがって、この両者のバランスが崩れる時に絶対王制は立ちいかなくなる。資本主義経済は封建的束縛を政治的・法的に打破する必要性に迫られ、そのため私的所有の不可侵性を根本的な社会原理として打ち出していく。政治的には自然権としての基本的人権を掲げて人間の平等を主張し、経済的には職業選択の自由や私有財産制の実現を求めて絶対王制を打倒した事件が市民革命であった。そこでは、精神的側面に関しても、宗教の自由や良心の自由とともに「教育の自由」として提唱された。ここから、国家目的実現のための絶対主義型公教育とは明らかに異なる公教育思想が登場する。

この型の公教育思想の典型は、フランス革命時革命議会の議員として活躍したコンドルセ（1743-94）が公教育制度の実現を目指して議会に提案した『公教育の全般的組織に関する報告と法案』（1793）に見られる。コンドルセは、自ら理性的に考え行動することができる自律的個人（能動的市民）の育成が公教育の目的であると考えた。そのためには公教育は、すべての人がその天賦の才能を発達させるために全員に公平に与えられなければならない。したがって、そのことを保障することは人民に対する政府の義務であるので、国家は公教育制度を整備する責務を持つが、そこでは専ら知育（真理のみの教授）に限定され、訓育（道徳性の形成）は家庭に委ねられるべきであるとする。このような公教育思想を自由主義的思潮と呼ぶ。

第4章 近代公教育制度の成立（19世紀）

I. 産業革命、市民革命と教育

1. イギリスの産業革命と教育

①年少労働への対策

1760年代にイギリスで始まった産業革命は、技術の発達に伴ったまさに生産様式の革命であった。これは社会構造にも大変革をもたらし、教育の分野でも新たな問題をはらむようになった。

産業革命によって、これまでの熟練労働者にとって代わって、賃金の安いしかも従順な年少者や婦人が労働者となる機会が増大した。年少労働者は劣悪な条件で過酷な労働を強いられ、学校に行って勉強することが困難な事態に陥っていた。こうした状況を打破するために、イギリス政府は1802年に「徒弟の健康及び道徳に関する法律」を制定した。これは世界初の工場法として価値あるものである。たとえば同法は9歳未満の年少者の労働を禁止し、1日12時間以上の労働の禁止を定めている。

②民間の教育施設の設立

ベル（1753-1838）とランカスター（1778 - 1838）は都市に流入した大量の年少者に教育を受けさせる機会を提供する制度を発案した。それは多くの生徒を教授するさい、生徒のなかで優れた者を助教と定め、助教は教師の指示を受けて他の生徒に教える方法である。助教を指揮することにより一人の主教受だけで多数の生徒の授業が可能となる、いわゆる助教法もしくはモニトリアル・システムを開発し推進した。発案した両者の名前をとって、「ベル・ランカスター法」とも呼ばれている。

ロバート・オウエン（1771-1858）はイギリスの空想的社会主義者で綿工場主であり、産業革命期の教育改革運動家の代表者でもあった。彼は自ら経営するニューラナーク紡績工場内に「性格形成学院」を設立し（1816）、労働者の子弟のための教育環境の整備に尽力した。彼は、環境が人間の性格に多大の影響を及ぼすと考えた。主著である『新社会観』の中の「性格は環境によって形成される」という言葉は有名である。

③スペンサーの功利主義

ハーバート・スペンサー(1820-1903)はダーウィンの進化論を諸科学に適用し、功利主義の立場から社会を一つの有機体と捉え、後に社会進化論を説く。主著の『教育論—知育・徳育・体育』(1861)では、個人の完全な生活に有用な実学的知識を重視した。スペンサーの教育論は、新しい時代の学校における教育内容をどうするかという検討に大きな影響を及ぼした。

2. アメリカ独立革命と教育

18世紀の半ば頃からアメリカ植民地に対して、イギリス本国は圧迫を加えるようになった。これによりアメリカはイギリス本国への抵抗を強めるようになり、1775年、ついに独立戦争が勃発し、翌年には独立宣言が発表された。アメリカ独立宣言の理念の一つは、万人に平等な教育の機会を提供することであった。そのためこの時期には多くの教育改革案が提出された。有名なものに、1779年に提出されたトマス・ジェファーソン(1743-1826)の知識普及促進法案がある。

ジェファーソンは独立宣言の起草者といわれ、後にアメリカ第三代大統領となった政治家である。1779年にヴァージニア州議会上に提案した「知識の一般普及に関する法案」(「知識普及促進法案」)は、国民教育制度の先駆的役割を果たすものであり、歴史上、高く評価されている。すでにこの当時、彼は3階梯の単線型学校体系を構想していたのである。この案は結局、議会の通過せず廃案となったものの、その後の公教育の実現に向けて大きな影響力をもつものとなった。

3. フランス革命と教育

ルイ14世(在位:1643-1715)の時代に絶頂を極めたフランス絶対王政は、18世紀後半になると衰退し始め、市民や農民は不満を高めていった。1789年、財政の建て直しのために開催された僧侶・貴族・平民の三部会における対立を契機として、フランス革命が起こり、平民部会は国民議会と名称を変更し、人権宣言を発表した。

このフランス革命との関わりで生じた政治・社会・経済的な諸改革は、深く教育の改革と結びついていた。そのため革命議会でも、新たな公教育体制の確立が焦眉の課題であり、様々な教育法案が提出され審議された。その中でも最も著名なものがコンドルセ案である。コンドルセ(1743-94)はフランス革命後、立法議会の議員となり、1792年に議会上に『公教育の全般的組織に関する報告と法案』を提出した。この法案は廃案になったとはいえ、国民教育を整備することは政府の当然の義務として、教育の自由の原則や教育の機会均等の原則を提起し、学問思想の自由と子どもの学習権を尊重するなど、優れた内容を含んでいた。

4. 各国の近代公教育制度の確立

①イギリス

イギリスにおいては1833年の民間学校建設への国庫補助金制度が、教育への国家介入の開始とされている。その後、公教育制度を求める声が高まるなかで、1870年にイギリス最初の初等教育法が制定された。起草者の名前をとって「フォスター法」と呼ばれる。ついで、1891年には、無償制が多くの学校で実施され、さらに20世紀に入ってから、1918年の「フィッシャー法」によって、14歳までの全日制義務教育化及び公立小学校の授業料の無償制が確立した。これは、イギリス教育院総裁フィッシャーに因んでつけられた通称である。

②フランス

フランス大革命以降も体制の変動が相次ぎ、教育改革案もまた廃案あるいは短命に終わる事例が多かったが、継続的な努力の結果、19世紀末に公教育制度の基礎が形成された。

19世紀に入り、産業革命が進むと、それに伴い、民衆を対象とした初等教育の改善が始まった。ナポレオンの失脚後、ルイ18世(在位:1814-24)が王位につき、王政復古の時代となり、1828年に教育行政の中核となる文部省が初めて設置された。それに続いて1830年の七月革命でルイ・フィリップ(在位:1830-1848)が即位し、ようやく初等教育の改善が着手され始めた。同年公布された憲法に基づいて革命政府が1833年に制定したのが初等教育法であった。「ギゾー法」とも呼ばれている。文部大臣ギゾーの名前に因んだ通称である。これはフランスにおける最初の初等教育に関する法律で、これにより小学校の数が増加し初等教育が国民の間に根づいていった。

その後、公教育制度への整備が続けられるなかで、文部大臣フェリーは1881年の教育法において、6歳から13歳までのすべての者の初等教育を義務制と定めると同時に、公立学校から宗教教育を排除した。これにより、現代フランスの公教育制度の基礎が構築されたのである。

③アメリカ

1776年に独立を達成したアメリカ合衆国は、19世紀に入り、民衆の子どものためのコモン・スクール運動が高まる中で、マサチューセッツ州において1852年に合衆国史上最初の義務教育法が制定された。同様の立法は南北戦争(1861-65)を経て西部や南部の諸州にも普及するところとなった。この義務教育法の制定に尽力したのが、アメリカ公立学校の父と呼ばれるホレース・マン(1796-1859)である。彼は、公立学校の基本理念を説き、米国最初の州教育委員会を組織し、初代の教育長に就任し、無償の義務教育制度を提唱した。また米国で最初の師範学校も設置した。

教育委員会制度はその後、他の州にも普及するようになる。マンと並んで活躍したのがコネチカット州教育長に就任したヘンリー・バーナード(1811-1900)である。

④ドイツ

1848年の三月革命によって教育改革の要求が増し、政府は同年、プロイセン欽定憲法を制定し、教育条項を宣言した。そこでは、学問・教授の自由、教育を受ける権利、親の就学義務、国の民衆学校設置義務および無償化等を明記した近代的内容が盛り込まれた。

1871年、プロイセンによって領邦国家が統一されドイツ帝国が成立した。鉄血宰相ビスマルク(1815-98)は、教育を帝国の発展の手段として重視するようになった。彼は1872年には「学校監督法」を公布し、教会と学校の分離を図り、学校の監督権を教会から国家に一元化した。

II. 近代的教育思想の展開 - ペスタロッチ思想の継承者たち

1. フレーベルの教育思想

フリードリッヒ・フレーベル(1782-1852)はペスタロッチの思想から大きく影響を受け、幼児教育に偉大な足跡を残した。主著に『人間の教育』(1826)および幼児教育の手引書である『母の歌と愛撫の歌』(1844)がある。

フレーベルによれば、万物の唯一の根源は神にある。自然も人間も共に神から生まれ、両者の間には同一の法則が支配している。神性は万物に宿り、万物は神がそのなかに働くことにその使命がある、とフレーベルは考えた。そこからフレーベルは、教育は人間のなかにある神性を導き出し、人間と神を合一させることが目的であると結論づけた。

このような考えから、彼は子どもの遊びと作業の体系である恩物を考案した。「神から与えられた物」の意である恩物とは、フレーベルが幼少年のために考案した体系的な遊び玩具で、ボールや積み木から成る。恩物は、万物の形式を含み、万物の法則を象徴するものである。それはまた幼児の創造力を伸ばし、自然・神・自己を知らせるものである。現代の幼稚園教育におけるさまざまな遊具・教具の発達はすべてこのフレーベルの恩物にその源泉をもっているのである。

世界で初めて幼稚園を創設したのが、フレーベルである。この一般ドイツ幼稚園(1840)は、教育の歴史に意義ある実践として銘記されよう。このことからフレーベルは「幼稚園の父」と呼ばれる。

2. ヘルバルトの教育思想

教育思想史においてルソーとペスタロッチの演じた役割はきわめて大きい。これらの教育思想に体系を与えて、これを科学的教育学にまで発展させることは19世紀から20世紀に生きた教育学者に求められた課題であった。この課題と真剣に取り組んだ最初の学者がヨハン・ヘルバルト(1776-1841)であった。

ヘルバルトは学問としての教育学を樹立するに際し、教育の目的を倫理学に、教育の方法を心理学に求めて、学問の枠組みを定立した。教育方法としては、「管理・教授・訓練」と教育の働きかけを三区区分し、また四段階教授法の「明瞭・連合・系統・方法」は、後々の全世界の教育界へ与えた影響力ははかり知れない。

ヘルバルトはフィヒテやシラーが教鞭をとっていたイェーナ大学に進学し、3年間の哲学研究を終えた後、21歳の学生のとき、スイスのベルン市へ遊学し、この地の知事であったシュタイゲル家の3人の子息の家庭教師となる。このときの貴重な教育体験が彼の教育論の出発点となった。またブルクドルフで児童教育の実践に没入していたペスタロッチを訪ね、実践から遊離しない教育学研究への基礎づくりを進めてゆく。主著としては『一般教育学』(1806)と『教育学講義綱要』(1835)等がある。

1809年にはこれまでの教育学研究が高く評価され、ケーニヒスベルグ大学へ迎えられ、カントの後任として哲学講座を担当することになる。哲学の講義と併せて教育学のゼミナールも開講した。

ヘルバルトの四段階教授法は、「授業の分節化」として現代にもその不変の価値を見出しうる。どの授業もその対象を完全に研究するには、対象への「専心(没入)」とそれを「致思(熟考)」するという交互作用が必要となる。この上にさらに、安らい

だ態度（静）と前進の態度（動）という、2つの区別が重なって、ヘルバルトはそれらを明瞭、連合、系統、方法という4つの形式的段階として位置づけた。

この段階を教師の教授活動という観点から説明すると次のようになる。「明瞭」（静的専心）において重要なのは、対象を示すことであり、その細部を確実に理解するまでその対象に専念させることである。「連合」（動的専心）においては自由な対話によって、新しいものをすでに知っているものに結び付けて内面的に同化させなければならない。「体系（系統）」（静的致思）においては、つながりの緩いものをまとめて統一し、最後の「方法」（動的致思）においては、子どもたちが自習で学んだものを新しい対象に応用するように導いていかなければならない。

3. ヘルバルト学派

ヘルバルトが心理学と倫理学を教育の基盤に据えたのに対して、弟子のツィラー（1817-82）はさらに宗教学を加えて教育目的の宗教的側面を主張した。また師の四段階教授法を五段階「分析・総合・連合・系統・方法」に改善したツィラーは、コア・カリキュラムの先駆ともいえる中心統合法を提唱した。

ライン（1847-1927）は師のツィラーの五段階教授法を修正して、「予備・提示・比較・総（概）括・応用」とし、より実践的にした。彼の五段階教授法が世界で広く受け入れられることになった。日本でも明治中期に、ハウスクネヒトが導入し、全国的に一世を風靡したのである。

第5章 現代の教育（20世紀）

I. 新教育運動の展開

19世紀末から20世紀初頭に、子どもを中心とする進歩主義の教育思想や実践が広範囲にわたって展開された。そしてその動きが世界的な規模になり、やがて「新教育運動」へと発展してゆくこととなる。従来の伝統的な教育方法を「知識注入主義」として批判的に「旧教育」と呼んだ。それに反対する立場として、子どもの自主性や興味・関心を重視し、一人ひとりの個性を尊重する路線を「新教育」と呼んだ。近世以来のコメニウス、ルソー、ペスタロッチらの思想に見出せる「子ども尊重」という点で、各地の新教育運動は共通する人間観を有している。以下、代表的な新教育運動を個別に見ていくことにする。

1. 田園寄宿舎系の新教育運動

19世紀後半、ヨーロッパ列強は産業革命を成功させ、経済的・軍事的に他国を征服する帝国主義や海外進出の段階に入った。この時期において、子ども本位の思想をベースにしつつも、新しい時代の要請にこたえる人間形成を旨とする教育改革の一つが田園寄宿舎系の新教育運動であった。

田園寄宿舎とは、19世紀後半から20世紀初頭にかけてヨーロッパ各地に起こった中等学校教育改革運動の一つで、田園に教育舎を建て家族的な生活による教育を重視した点に共通点を有する。セシル・レディ（1858-1932）のアボツホルムの学校（1889）、またフランスではドモラン（1852 - 1907）のロッシュの学校（1899）、ドイツではリーツの田園教育舎（1898）等が有名である。

たとえば、レディは従来のグラマー・スクール等で実践されていた文法・古典語中心の教育を廃止して、活動的な人物育成を主眼とした少人数制の教育を行った。自然環境の中で、労働・スポーツ・芸術等を重視して、家族的な生活による教育を目指したのである。

また、イギリスの教育家であるニール（1883-1973）は、フロイトの精神分析学を基盤に、徹底した自由と自治の教育を実践するために、世界で一番自由な学校といわれているサマーヒル学園をドイツのドレスデンに創設（1921）した。

2. デューイの教育思想

ジョン・デューイ（1859-1952）はプラグマティズム（道具主義・実験主義）の立場に立った哲学者・教育学者である。彼の学習方法は問題解決学習と呼ばれ、アメリカの「進歩主義教育運動」の指導的立場につき、戦後日本の教育へも多大の影響を与えた。「為すことにより学ぶ」という経験主義を主張した。主著に『学校と社会』（1899）や『民主主義と教育』（1915）等がある。デューイの思想の根底には、アメリカ民主主義の原理が厳然と存在する。

デューイによれば、人間の成長は、経験を絶えず再構成していくことである。経験とは、人間の活動と環境の間の相互作用から形成され、したがって教育とは「その後の経験を成長させるように経験を再構成すること」に他ならない。

デューイは、すべての成員が等しい条件でその社会の福祉に関与できるように環境が整備され、その制度を柔軟に調整できる社会を「民主的な社会」という。民主的な社会では、人々が社会の關係に自ら関心をもち、混乱を引き起こすことなく社会の変化をもたらすことができる習慣を身に付ける教育を必要とする。

3. デューイ以降のアメリカ新教育の改革案

アメリカでの新教育運動は、第一次世界大戦(1914-8)以後において、民主主義が高まるなかで並行して活発になってきた。

①キルパトリックのプロジェクト・メソッド

新教育運動の推進者でデューイ教育学の継承者でもあるキルパトリック(1871 - 1965)が、「生活即教育」の方法論を展開し、プロジェクト法として理論化した。プロジェクトとは「社会的環境の中で行われる、全精神を打ち込んだ目的ある活動」、すなわち社会生活における具体的な問題解決のための自己活動を意味する。その順序は、問題の設定、計画の立案計画の実施、最後に評価である。

②ウオッシュバーンのウィネトカ・プラン

ウィネトカ・プランを組織したウオッシュバーン(1889 - 1968)も進歩主義教育運動の中心的指導者であった。1919年から43年までイリノイ州ウィネトカ市の教育長の時にこのプランを考案した。ウィネトカ・プランでは、たとえば、学習進度の個別化を図ることや創造的活動を重視した。また教育課程を、基礎教科(数学、国語等)と集団的・創造的活動(音楽、体育等)に二分した。すなわち、読み・書き・計算といった共通基本の内容について個別学習を実施するコモン・エッセンシャルズと呼ばれる教授法を柱にしたものと、学級を単位として、集団精神、独創性等を培う集団的創造的活動からなる。

③パーカストのドルトン・プラン

ドルトン・プランとは、1920年にマサチューセッツ州ドルトン町の高等学校において、パーカスト(1887 - 1973)女史により提案された個別学習法である。進歩主義教育観に立って、教科を主要教科と副次教科に分け、主要教科において生徒と教師とが契約という形態をとり、教師は生徒の自学の個別指導にあたった。副次教科は午後実施され、これは学年別の学級単位の授業となる。

4. ドイツの改革教育学

19世紀後半から今世紀にかけて、ドイツに優れた教育思想家が輩出し、我が国の教育界に強い影響を与えた。

①ナトルプ

新カント派のマルブルク学派の代表者であるポール・ナトルプ(1854-1924)は、教育の根本に意志の陶冶を置いた。また教育は社会なしには成立しないという内容の『社会的教育学』(1898)を著した。学校を統一労作社会とすることで、国民分裂の克服を目指した。彼自身はペスタロッチを高く評価し、カントの批判的方法によってヘルバルトの教育学を批判する。ナトルプ自身、自己の立場を社会理想主義と称した。

②シュブランガー

哲学者であり、教育学者であるエデュアルト・シュブランガー(1882 - 1963)は、文化教育学の発展に尽した。ディルタイやパウゼンの学説を継承し、実存哲学に至る思想を受け入れ、主著に『生の諸形式』(1914)や『文化と教育』(1919)がある。文化教育学は客観的文化の主観化を主張し、「学問と生活における文化と教育の関連をめざす」精神活動とされている。

③ケルシェンシュタイナー

『公民教育の概念』と『労作学校の概念』(1911)で有名になったゲオルク・ケルシェンシュタイナー(1854-1932)は、教育の目的として公民教育を、その方法として労作教育をとることを主張した。シュブランガーの影響で、文化教育学の立場をとり、またミュンヘンの視学官を務め、教育行政の上で多くの功績を残した。

④クリーク

エルンスト・クリーク(1882-1947)は純粋教育科学の創設に尽力した。彼は、広い視野から無意図的な教育を重視するべきだと考え、さらに教育は社会の根本的な機能であるとして、単なる教育技術学の枠を超えた教育科学の樹立を目指した。主著に『教育の哲学』(1922)がある。

5. ロシアの教育学

ロシアにおいては、第一次世界大戦末期の1917年に、革命が勃発した。その結果、世界初の社会主義国家が誕生した。この時期には多くの混乱とともに、新たな社会を形成することを試みる教育思想が生み出された。その中でもとりわけクルプスカヤとマカレンコの理論が大きな影響力を発揮した。

①クルプスカヤ

クルプスカヤ(1869 - 1939)は、ソビエト共産党革命の指導者であったレーニン(1870 - 1924)の妻である。彼女もまたソビエト共産党の活動家であり教育家でもあった。1915年、最初のマルクス主義教育学書『国民教育と民主主義』を夫レーニンと共著で刊行した。彼女はまた、少年団(ピオネール)等の校外生徒組織を創設している。ピオネールとは、旧ソビエトの児童を対象とした共産主義組織で、この指導には10~15歳のコムソモールと呼ばれる青年の共産主義組織が担当した。少年団にはほとんどの子どもたちが加入し、そこで討論会、社会奉仕活動、キャンプ等を経験することになる。

②マカレンコ

旧ソビエトの代表的教育家で作家のマカレンコ(1889-1939)は、未成年法律違反者のためのゴークー労働コロニーを組織した。すきんだ少年たちを、ソビエト社会主義社会のりっぱな市民に作り変えようと努力した。子どもの集団の形成を重視する集団主義教育や、愛と規律の家庭教育を主張した。主著には、『教育詩』、『塔』の上の旗』、『愛と規律の家庭教育』等がある。

6. 新教育のその他の潮流

①エレン・ケイ

スウェーデンの女性思想家であるエレン・ケイ(1849 - 1926)は、1900年に『児童の世紀』を著した。「児童から」のスローガンのもと20世紀新教育運動のさきがけとなり、ルソーの消極教育を徹底させた。ケイの「教育の最大の秘訣は教育しないことにある」は有名な言葉である。

またケイは、幸福な子どもこそが理想的な人間的前提であるという考えに基づき、教育学を構築した。そのためには、自由で幸福な家庭、自然な教育を実践する学校、女性が解放される社会が建設されなければならないと考えた。

②モンテッソリ

イタリアの医師で教育者であるマリア・モンテッソリ(1870 - 1952)は、フランスの医師で聾啞教育者でもあるイタール等の影響を受け、知的障害をもつ子どもたちの教育において業績を残した。

近代イタリア初の女性博士であるモンテッソリは、1907年にローマにある保育施設に迎えられ、これを「子どもの家」と名づけ、3歳から6歳までの教育を5年間実践した。また幼児教育の分野においては様々な教具を用いて感覚運動能力や知的能力をつけるモンテッソリ法は著名で、各国の幼児教育現場で実践されている。モンテッソリは、主著『モンテッソリ法』を1909年に刊行している。

II. 第2次世界大戦後の教育改革

19世紀に入って資本主義体制を強化したヨーロッパ諸国は、19世紀後半、資本主義の独占段階である帝国主義に進んでいった。急激な社会変化に伴う社会内部の矛盾が諸国家間で顕在化し、国際的軋轢を経て、第一次と第二次の2つの大戦の勃発を見ることになる。そして大戦の終了後、ヨーロッパ諸国では、民主主義の理念に基づく新しい学校体制を整える傾向が顕著になる。そうした背景には、労働者階級の成長、保守と革新の対立、民主的努力の発展という事態が影響しているものと考えられる。このような社会の動きは、当然のことながら各国において、教育制度の変革や教育内容の再編成の流れを生み出していった。

1. イギリスの改革

第二次世界大戦終了直前に「すべての者に中等教育を」をスローガンに掲げて、「バトラー法」が制定された。これは、イギリスの教育院長官バトラーが1944年に制定したもので、第二次世界大戦後のイギリスの教育制度の基本的骨子を規定した。基本理念は教育の機会均等で義務教育期限の延長も提言している。この提言により初等段階での複線形学校体系が解消されたものの、その後、11歳試験(イレブン・プラス試験)が導入された。この試験の結果によって子どもたちは3種類(グラマー・スクール、テクニカル・スクール、モダン・スクール)の中等教育学校に振り分けられた。

現在はこの試験を廃止している自治体が多く、そのまま総合制中学校（コンプリヘンシブ・スクール）に進学する。この学校の特徴は、すべての生徒が中等教育機関に進学できる機会を保障する受け皿として用意され、さらに多種多様な生徒の教育ニーズに応えるところにある。

2. フランスの改革

第二次世界大戦後のフランスにおける教育改革は「ランジュバン＝ワロン改革案」（1947）から開始された。これは委員長ランジュバンの名に因んだ呼称であり、ランジュバンの死去後委員長を引き継いだワロンの名も添えて呼ばれている。義務教育年限の延長等、戦後のフランスの教育の方向を示し、その理念は1959年のベルトワン改革等において実施されていった。

1959年の「ベルトワン改革」では、小学校を卒業すると全員が中等教育第一段階のコレージュに入学することに改められた。コレージュでの2年間の観察期間を終えたのちに高等教育準備機関である普通教育リセ、あるいは大学進学を考えない職業教育リセ等のコースに振り分けられることになった。

さらに1975年には「教育基本法」が制定され、制度の見直しが再度行われた。これを「アビ改革」という。この改革により前期中等教育機関がすべてコレージュに統一された。アビ改革によって、従来のフランスの複線型中等教育が単線型に改められ、教育の民主化が急速に進められた。

3. ドイツの改革

ドイツでは、早くから複線型の学校体系が形成されており、特権階級の子どもたちは、フォア・シューレで3年間の初等教育を受けた後、中等学校であるギムナジウムで9年間学ぶことになる。

一方、子どもたち全体の9割を占める大衆の子どもたちは、フォルクスシューレで9年間の教育を受ける。ドイツの初等教育は4年間のグルント・シューレとその上の5年間の高等科からなっており、これらを併せた学校をフォルクスシューレと呼んでいる。

第二次世界大戦後さらに改革が進められ、1959年の「ラーメン・プラン」を大綱として、ほとんどの者が、共通のグルント・シューレに就学するようになった。ラーメン・プランとは、1959年に決議された連邦レベルにおける大綱案で各州の文相により協議された。複線型の学校制度の継続を提唱したが、翌年のプレーメン・プランでは10年制の統一学校が提案された。

4. アメリカの動向

「国防教育法」（1958）は、アメリカにおける連邦レベルでの科学教育振興を目的とした法律で、1957年にソビエト連邦が打ち上げた史上初の人工衛星スプートニク号に刺激（スプートニク・ショック）されて制定されたものである。この法律による科学教育振興策を推進するため、1959年マサチューセッツ州のウッズ・ホールに30数名の科学者、教育学者が集合し、初等・中等学校における科学教育の改善について討議が行われた。その討議の成果は、議長を務めた認知心理学者で思考過程の研究で著名なジェローム・ブルーナー（1915- 2016）によって『教育の過程』（1960）としてまとめられた。そこでの核になる考え方が「発見学習」と呼ばれるものである。これは、学習者自らの内発的動機により、問題を解決する能力や学習の仕方等を発見することを主眼においた教授法である。『教育の過程』はアメリカの進歩主義的教育が知的生産性において非能率的であることを指摘しつつ、新たなカリキュラムを提案するものであり、教育の現代化に大きく貢献した。

【参考文献】

- 1) 梅根悟『世界教育史』、新評論、1967年改訂版
- 2) 〃 『教育の歴史』、新評論、昭和50年新装版
- 3) 田中克佳編著『教育史』川島書店、1987
- 4) 山崎英則、徳本達夫編著『西洋教育史』ミネルヴァ書店、1994
- 5) 〃 『西洋の教育の歴史と思想』ミネルヴァ書店、2001
- 6) 荏司雅子監修『現代西洋教育史』亜紀書店、1969
- 7) 荒井武編著『教育史』福村出版、1985
- 8) 池端次郎編『西洋教育史』福村出版、1994
- 9) 渡部晶、木下法也、江藤恭二編著『西洋教育史』学文社、昭和49年
- 10) 〃 『西洋近代教育史』学文社、昭和54年
- 11) 村井実『教育思想（上）-発生とその原因-』東洋館出版社、平成5年
- 12) 〃 『教育思想（下）-近代からの歩み-』 〃 、平成5年
- 13) 佐藤英一郎『大教育家-生涯と思想-』金子書房、昭和52年
- 14) 林正登『教室に生きる教育思想-教育史学からの現場への提言-』北大路書房、1987
- 15) 浅野啓子、佐久間弘展編著『教育の社会史-ヨーロッパ中・近世-』知泉書館、2006
- 16) 江藤恭二、篠田弘、鈴木正幸編『子どもの教育の歴史-その生活と社会背景を見つめて-』名古屋大学出版会、1992
- 17) 石橋哲成『ヨーロッパ教育史紀行』玉川大学出版会、1983
- 18) 川瀬八州夫『教育思想史-人間観の発展と教育-』垣内出版、昭和63年
- 19) 小澤周三、影山昇、小澤滋子、今井重孝『教育思想史』有斐閣、1993
- 20) 篠原助市『欧洲教育思想史（上）』玉川大学出版会、昭和47年
- 21) 山田栄、富田竹三郎、工藤泰正共著『増補 新西洋教育史』、協同出版、昭和47年
- 22) 岩本俊郎編著『原典 西洋の近代教育思想』、文化書房博友社、1998
- 23) 石橋哲成、佐久間裕之編著『西洋教育史 新訂版』、玉川大学出版部、2019
- 24) 吉田武男監修、尾上雅信編著『西洋教育史』、ミネルヴァ書店、2018

Overview of Western Education History

–From the viewpoint of development of educational thought–

Masahiko SOGA

Department of Applied Science, Faculty of Science

Okayama University of Science,

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 31, 2019; accepted December 9, 2019)

This work is a textbook for the specialized subject “History of Western Education” in the teaching course of the university. Here, I summarize the flow of education history in the West from the beginning of youth education in the city-states of ancient Greece to the educational reform of each country after World War II.

This paper consists of five chapters. Chapter I covers ancient and medieval education. This chapter consists of three topics: “Education in Ancient Greece”, “Education in Ancient Rome” and “Education in the Christian Church”. Chapter II focuses on early modern education and examines two topics: “Renaissance and Education” and “Reformation and Education”. Chapter III organizes the generation and development of modern educational thoughts. Chapter IV traced the formation process of modern public education systems in Western countries. Finally, Chapter V covers 20th-century education, and examined the development of the New Education Movement and the trend of educational reform in each country after World War II.